

被災地におけるスタディツアーが参加者の抱く訪問先への愛着に与える影響 - 農学部学生を中心とした福島県飯舘村訪問を事例に -

Effect of Study Tour toward Participants' Attachment on the Study Site - Case Study of University Student Tour to Iitate Village, Fukushima Prefecture -

*蛸谷 夏海¹、溝口 勝¹、杉野 弘明¹

*Natsumi Ebitani¹, Masaru Mizoguchi¹, Hiroaki Sugino¹

1. 東京大学大学院農学生命科学研究科

1. Graduate school of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo

東日本大震災の被災地での復興が進んでいるが、被害への理解の風化を感じる人は多い。しかし震災を教訓とし、復興後の発展を進めるためには、被災地域外の人に地域の魅力を伝え、交流の機会を作ることが必要である。そこで筆者らは被災地スタディツアーの定期開催を検討している。今年度は2018年10月～11月に、福島県飯舘村を訪問地としたケーススタディとして1泊2日のスタディツアーを3回実施した。ツアー前後には参加者である大学生(計44名)に質問紙調査を実施し、得られた結果を共起ネットワーク分析や因子分析により解析し、本スタディツアーが参加学生の農村への愛着等に対する影響を検証し、今後のスタディツアーについて検討した。

キーワード：スタディツアー、農村交流、地域愛着

Keywords: study tour, rural exchange, place attachment